

書くということ (特集 アジ研流読書案内 -- 研究者が薦める3冊)

著者	湊 一樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	5-6
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045920

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊

書くことについて

湊一樹

ツがテンポのよい対談形式でわかりやすく紹介されている(例えば、「遊び」心を大切にする)、「センテンスは頭の中で完成させてから実際に書く」、「ロジックとレトリックをうまく組み合わせながら議論を展開する」など)。

●学校では教えてくれない

「知識の裏付けのない熱意は光のない火のようなものである」という有名な英語の警句は、文章を書くことにもそのままあてはまる。つまり、伝えたいメッセージを書き手がいくら持っていたとしても、それを読み手に理解してもらえないように適切な文章で表現できなければ何の意味もないのである。

ところが、作文や読書感想文をやたらと書かせたり、漢字や日本語文法をむやみに暗記させたりする一方で、日本語で文章を書くための基礎的な技術は学校ではきちんと教えられる。少なくとも自身は、基本的な作文技術を学校で学んだという記憶がまったくない。実に不思議である。

本多勝一『日本語の作文技術』

(朝日文庫、一九八二年)は、日本人の書く文章に非論理的なもの

を通して、この点について考えてみたい。

●はじめに内容ありき

夏休みや冬休みに学校から出される宿題の中でも、読書感想文ほど嫌なものはない。読みたくもない本を勝手に指定されたうえに、その本についての感想を原稿用紙で数十枚にわたって書かなければならないというのが苦痛でたまらなかつたからである。こんな調子で嫌々やっていたのでは、大した内容のものを書けなかつたのは当然だろう。

文章を書くうえでのもっと大切なポイントが、やはり、「読者に伝えたい!」と思える内容をしっかりと持ったうえで書くということに尽きる。この点について、作家の丸谷才一は『思考のレッスン』(文春文庫、二〇〇二年)の最後

で、

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに書くこと」。

これは、一昨年の四月にこの世を去った作家の井上ひさしが色紙などに好んで揮毫した言葉である。書くという行為に求められるすべての要素を漏れなく、それも限りなくシンプルな形で表現した畢竟の名言といえるだろう。

しかし、いくら練達の名作家の金言に触れたからといって、私たちが突然いい文章を書けるようになる訳ではない。さらに、大向こうを唸らせるような文章となればなおさらのことである。

では、「むずかしいことをやさしく:」という究極の高みに一歩でも近づくには、一体どうしたらいいのだろうか。私自身が文章を書く際に参考になっている三冊の本

が少なからず見られる一因として、このような教育面の問題を指摘している(二五ページ)。そして、その空白を埋めるべく、わかりやすい文章を書くために必要な作文技術―例えば、修飾する言葉とされる言葉のつながり、修飾語の順番、助詞の使い方など―をひとつずつ具体的に説いていく。

その中でも特に参考になるのが、句読点の打ち方に関する部分(第四章)である。句読点をどこで打つべきかという問題にはいつも悩まされるが、この本で著者が示す原則は単純明快かつ筋の通ったものであり、非常に説得力がある。

●「サービスマン」としての物書き

ただし、書くに値する内容を見つけ、それを正確に読者に伝えるために基本的な作文技術に従って書いたとしても、まだ十分とはいえない。自分が書いた文章を最後まで読んでいた。だ。く。た。め。に。は、読者を飽きさせないようサービスマンを発揮しなければならぬのである。

例えば、随筆やノンフィクションなどを念頭に置いた文章術に関

する本には、書き出しの重要性について多くのページを割いているものが見られる。読者に「書き出しで見放されたら、あとにいくらよいことが書いてあっても、読んでもらえない」(野村「二〇〇八・一三二―一三三」)というのがその理由である。

一方、学術研究の場合、職業上の必要から我慢して読まざるをえないという読み手の側の事情や小難しい日本語で書かれたものの方が深遠であるかのように誤解してしまう読者の存在によつて、サービスマン精神のない書き手であっても大目に見られてしまう。そのため、分野や発表形態によつて事情は異なるものの、読者を飽きさせないための工夫が書き手に求められるという意識はあまり浸透しているようには見えない。

そんななかにあつて、社会科学の分野で見事な書き振りで読者の関心をうまく引き出しているといつも感心させられるのが、社会学者の竹内洋による一連の著作である。そのひとつ『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、一九九九年)は、高級官僚の家庭に生まれ、ハイカラな山の手階級のおぼっちゃまとして育ちながら学歴

エリート道を大きく踏み外してしまふ永井荷風と、それとは対照的に、下町の中産階級に生まれながら学歴貴族に成り上がっていった芥川龍之介の描写から始まる。本書を読み進めていくと、二人の作家の社会的軌道を対置させた冒頭部分は、近代日本の高等教育制度の変遷やその社会的影響についての見事な導入になっていることがわかる。

興味深いエピソード、時代背景や制度的背景の説明、理論的な枠組みに基づく分析という三つの要素を有機的につなぎながら議論を進めていく手際にはただただ驚かされる。

●アカデミズムの責任と無責任

『学歴貴族の栄光と挫折』に付録として付いている小冊子には、作家の猪瀬直樹と著者の対談が収められている。その冒頭で、竹内は「アカデミズムにはもつとジャーナリスティックなセンスが必要だし、ジャーナリズムはもつとアカデミックな厳密に調べる方法論を採り入れてほしい」と苦言を呈している。

最近、テレビや新聞などを見て

いると、なぜこんな人が「専門家」として登場しているのだろうか」と首をかしげたくなることが少なくない。しかし、このような状況を招いているのは、視聴者や読者を愚弄しているのしか思えない人選を平気でするメディアの責任だけどもなければ、地道な調査・研究などろくにしていないのに「専門家」を自称する大学教授や評論家のせいばかりでもない。

むしろ、普通の人でも読めるような文章を書くという修練を怠り、隠語めいた小難しい専門用語で意思疎通する(または、意思疎通しているふりをする)ことにすっかり慣れきってしまったというアカデミズムの住人たちにこそ最も大きな責任がある。なぜなら、彼らが「むずかしいことをむずかしく」しか書こうとしない限り、メディアと「専門家」の間の持ちつ持たれつの共犯関係を突き崩すことはできないからである。

(みなと かずき/アジア経済研究所 在デリー海外派遣員)

《参考文献》

①野村進「二〇〇八」『調べる技術・書く技術』講談社現代新書。